

宗教々育の長短

陸軍士官學校教授
大正大學教授文學士

大村 桂 巖

宗教々育と云ふ事は私自身としては夙くから考へてゐた事であつて、機會のある際には既に幾たびか其の必要を主張したほどである。しかし今日では、何れかと云ふと寧ろ、宗教々育を施すがために何か弊害が起りはしないか、直接には教育上に、間接には國家、社會の上に害を及ぼしはせぬかと云ふ點に、主として注意を加へてゐる。世間では今となつて頻に宗教々育の必要が絶叫され高調されてゐるが、我々の如く已前から其の主張を續けて來た者から觀ると、餘りに遅れてゐると感ぜられる。尤も遅れてゐても何でも、凡てが其の必要に著眼して之が實行せられむとする機運が近づいたのは大いに欣ぶべきであるが、斯くして遂に宗教々育が行はれることになれば、次に來るべきものは其の反動の時代である。即ち再び宗教々育の弊害を攻撃し宗教々育を排斥するに至るであらう。故に私は今から豫め宗教

々育の弊害に著眼して、之が豫防の方法を講じて置く必要があらうと考へる。

宗教々育が最近殊に我が國で注意せられ始めた動機は、恐らく各方面に、種々あるであらうが、其の最も直接なものは、世界思潮の壓倒的流入、其結果の思想混亂、青年の多くが歸趨する所を知らないで迷うてゐる今日の状態を拯ふ何等かの力を宗教に求めんとすることにありはせぬかと思ふ。そこで今日、宗教々育即ち換言すれば宗教を教育の手段に用ゐようとする考は、果して有效であるかどうかと云ふことが、客觀的には問題となつて來る。之に對する觀察は、宗教家と教育家とで各々異なるであらうが、私は専ら教育家の立場からして、宗教的方面の陶冶が教育上果して必要であるか否かを茲に検討したいと思ふ。

元來宗教なるものは最も多く感情に關してゐる。随つて學者の多くも、宗教を以て智情意の三作用中、殊に感情の要求から起つたものだとしてゐる。此の派の著るしい代表者はシュライエルマツヘルである。シュライエルマツヘルは、十九世紀前半の哲學者で、殊に社會本位の教育を高調した人として知られてゐるが、此の學者は感情の優越を宗教に認めてゐる、即ち感情に強い意味を持つてゐるものとして宗教を觀てゐるやうである。カントも亦宗教を高調したが、此の人は反對に理性主義の上に立つて、専ら智的方面から宗教を觀てゐる。なほ又シュライエルマツヘルと略ぼ同時代のヘルバルトは、主とし

てカントの流を汲んで、道德を重んじてゐる一人であるが、一方では理性主義の上に立ちながら、他の一方では頗る意思を重んじて、社會的・道德的活動の點から宗教の必要を力説してゐる。

斯の如く從來の學者は、或は感情的方面から、或は智的方面から、或は意思の方面から宗教を見て來たが、最近に至つて、獨逸の新派の代表的な人であるヴィンデルバンドは、之を批評して、宗教は智情の總てを綜合統一した態度を持つてゐる。三者の何れに偏しても宗教は味へない。シュライエルマツヘルの説にも道理はあるが、感情のみではいけない。又意思のみでも智のみでも駄目である。三つのものが完全圓滿に調和し統一された状態に於て初めて平安が得られるのであると説いてゐる。私も大體に於てそれに同感である。

私は敢て茲に宗教々育の根本原理を説くのが目的ではなく、又宗教其のもの問題に觸れむとする者でもない。只宗教々育の可能性の要點を明らかにせむとするまで、あるが、其の意味に於て宗教々育に於ける人格陶冶の可能性は、智情意の三者の各單一な方面に於ては現れないで、三者が綜合し統一された状態に於て初めて發揮されるものであることを確認する。宗教の宗教たる本色は、恐らく其處にあらうと思ふ。

但し、ヴィンデルバンドは、智慧の方からは眞、意志の方からは善、感情の方からは美と、此の三つ

のものが、各それ自身獨自の作用をしてゐる場合は、眞の眞、眞の善、眞の美は現れない。それ等の總てが統一された状態に於て其の各々は初めて完成する。即ち其處に眞の光が現れると觀てゐる。そして斯う云ふ風に、價值の上からは、すべてを調和し統合したところに、宗教の境地があるとして、之を「聖」として現してゐる。ヴインデルバンドの此の「聖」の考へは甚だ面白いが、併し其の「聖」が常に綜合統一の状態に於てのみ存するとする其れ丈の考には反對である。私は其外に「聖」は常に背景として存在するものであると思ふ。後方に控へてゐて、眞の光を眞善美に現すものが即ち「聖」であると思ふ。之を一家族の關係に於て觀るならば、「聖」は家長の如き位置に立つものである。假に私が一家の主人であり親であるとして、三人の子があるとすれば、そして又同時に「聖」の位置を取るとすれば、私は單なる家族の一人ではなく、常に全家族の背景である。眞と云ふ長子も、善といふ仲子も、美と云ふ末子も、各獨自の能力を發揮するが、其の働きは常に私の或るものによつて現されてゐるのである。言ひ換へるならば、後に控へてゐる親によつて、凡ての子の働きは與へられてゐるのである。之と同じ事で宗教の「聖」は、價值の上では獨立的であるか、即ち父といふ家族の一員であるが、他の一面では綜合的統一的な背景となつて眞善美の母胎を形つてゐるものである。即ち出發點であつて、同時に歸趨點であるのである。

是等の中で最も問題になるのは知識的方面であるが、京都大學の西田博士等の哲學を參考すると、明らかに之を了解することが出来る。我々が眞に眞理であると思ふものは、普通の認識即ち知識では分らないものである。即ち反省的思惟の所産である普通の経験だけでは解らない、其れ以前の経験の領域に屬するものである。學者は之を純粹經驗と呼んでゐるが、此の純粹經驗は知識以前の経験を指すのである。今、我々が我々の過去の経験を振り返つて見た時の認識、それが即ち知識であるが、其の以前直接に或る経験をしてゐる其瞬間には反省がない、其の状態が即ち純粹經驗である。そこで我々が今問題としてゐる所の「聖」も亦知識的經驗即ち普通の経験ではなく、念々刻々に於ける我々の生活が綜合し統一されつゝ進み行く純粹の經驗、生命の經驗であるのである。

斯う云ふ風に宗教を考へて來ると、眞の人格を作らむとする教育は此の點に常に中心を置かねばならぬ。分裂した或る一部の上には置かないで、それ等の總てを統合した背後の光によつて、眞の眞善美を見るやうにせねばならぬ。

それでは其の「聖」の境地なるものが、人間にあるかどうかと云ふと、これは大分にむつかしい問題であるが、此の頃の心理學の上では宗教本能を人間に認めてゐる。生理學生物學に根據を置いた心理學として、最近大いに勢ひを占めて來た生理學的心理学に於ても、宗教本能の存在を許し、遺傳的に宗教

要素が刺戟に依つて反應することを論述してゐる。兎に角さういふ類の萌芽が、兒童の頭にあることは、今日最早争のない所であると云つてよい。尤も其の宗教要素が、如何なるチャンスに於て起るか、或は又如何なる因縁で現れるかといふ事は、個々の問題であるが、既にさういふ貴い萌芽がある以上、それを毀さぬやう傷つけぬやうに完全に生ふし育て、行くことは必要であつて、宗教教育の可能性は其處にあると思ふ。

私はこれ等の點からして、宗教教育も亦教育方法の一方を分擔して然るべきであるとするのである。

教育の目的は、之をむつかしく言ひ出すと際限がないが、要するに心の教育と身體の教育との二つに大別される。身體の教育は肉體の鍛練と體力の養成で、これが體育。心の教育は智情意の三方向に分れて、それが又眞善美の三つともなる。

此の眞、善、美の背景になるものが聖であると云ふことは前に述べたが、此の「聖」と「眞」との関係は少しく説明が面倒である。次には智であるが、智を四つに分つて、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智としてゐる。そして其の四智の解釋から行くと、其の中でも殊に根本となるのは第八識即ち阿頼耶識の現れであつて、これが智の極致だと云ふことに成つてゐる。そこで考へられるのは、教授とい

ふことも、智育と云ふ事も、其處まで到達せねば眞の教育にならぬのではないか、教師に其處までの頭が無ければ、體驗を取る知識は現れて來ぬのではないかといふ事である。2に2を足して4になるといふ知識で金儲けは出来るかも知れぬが、人間としての光ある知識は、そんな物的な知識の中からは發揚して來ない。此の事は恐らく經濟上についても又政治上についても言へる事であると思ふ。

斯ういふ事から考へて、私は宗教々々が教育の中に一の位置を取ること何としても必要であると思ふ。私は其處に宗教独自の權威が現れて來ると觀る者であつて、今日の教育には、其の一手段として宗教教育が行はれて然るべきである。既に眞、善、美の立場から、教育上に教授、訓育、美育の働さを認めるならば、其の他に聖の働さを意味する宗教教育が起らねばならぬのは當然の事である。

今日教育上で最も重んぜられてゐるのは智徳體の三育で、これに美を入れれば四育であるが、これだけでは眞の人格陶冶は出来るものでない。本當に人間を完成せしめる爲には、聖が其の背景となつて、人間生活、國民生活の上に光を反映せねばならぬ。即ち宗教々々の價值は、すべての教育方法の背後に立つて、之を綜合統一する位置に立ち、すべてのものに力と生命とを與へることに存するのである。

そこで、それでは宗教々々を行ふことに依つて人心陶冶の上に如何なる効果を現すことができるかと云ふと、其の最も主要なものは信念の陶冶である。即ち堅固な信念の有る人間を作出するのが宗教々々の

特色である。

宗教の特殊態度は東洋流で云ふと南無の二字に歸する。南無とは歸命の謂であつて、命を佛陀に任せざるといふ、此命を差し出すといふ、そこに宗教の強い所があると思ふ。其の果して何に歸命するか當體は、各宗教それぞれの立場で異つた開展をする事であらうが、こゝでは暫く別問題として置かう。しかし當體は異つても、南無の状態が其の特徴であることに於ては、どの教にも變りはないのである。禪宗の如きは悟を開くこと即ち自己の心性を徹見して自證三昧の境地に體達するのが宗要である。即ち平たい言葉で云ふならば「悟れば凡夫も佛である」といふ所に歸するのが斯の宗の本旨であるらしい。が、若し釋迦何人ぞ、己れ何人ぞ、彼も佛なら我も佛で、凡佛一如である、不二であると考へるならば、即ち此自分が其儘佛であるならば、殿堂の莊嚴も儀式的な讀經も、禮拜も、行道も一切必要がないのはあるまいかと思はれる、がさう早合點してはならぬ。私は彼の禪宗は、東洋的な汎神教的な全一宗教の代表的なものと觀てゐるが、此の自力聖道門の悟を開く宗旨にも「南無」は要るのである。私は友人の禪僧に、禪宗では無を説くが、それでは何物もないのかと尋ねたところが、イヤ只の無ではない、ムーウと言ふのである。無のあとには有がついてゐると答へた。私はそれを當時非常に面白く感じて聞いたが、確に禪宗でも南無がある以上、歸命の當體は有るのである、恐らく其處が全一宗教の特徴であつ

て、自分が佛であると信ずる境地にも何者か自分以上のものがあるとして之に歸命する心持はあるのである。

斯の如く東洋の宗教態度は南無にある、そして其處に非常に力強い信念の湧起がある。ところが、現在の世相の上には種々の缺陷が見られる中に、其の最も大きな缺陷は何であるかと云ふと、一般に堅實な信念のない事である。だから此の缺點を補ふために、此の特色を持つてゐる宗教を利用して精神教育の資料としたならば、一般子弟をして剛健な信念を抱かしめる効果があらうと私は考へるのである。

歸命の心持、即ち自分以上の何者かに自分の全生命を捧げ、自分を任せきつて、無我無心の生活をする所に、上に向つては敬虔の禮を盡し、下に對しては慈愛の情を持つ氣分が油然而として湧いて來るのである。今日の社會で著しく我々の眼に著くのは、上を敬ふ敬上心が甚だしく減耗してゐる事である。此の風潮は近來マルクスなどの思想が入つて來て、餘程之を助長したのであらうと思ふが、兎に角上下の階級を認めるといふ意識が最近目に立つて衰へて來つゝある。尤も見方によつては階級意識を重んずる必要はないかも知れぬが、一般的に觀て、立派な人格者、崇仰するに足る德行のある人物は、概して上級に位するものと觀ねばならぬ。斯かる立派な人物は之を上位に置いて、敬ふといふ者がなければ、團體生活の秩序は保てない。其處には禮節の美しさ、熟練された道德上の美しさもなく、一家の内に於て

も外に於ても、非常に紛淆混亂した社會状態を現出するのみである。

上を敬ふ心の深いものであつて、初めて多數の下級者に博愛の情を注ぎ得るのであると私は思ふ。そして斯かる敬上慈下の信念の中からこそ、眞の同胞團體精神は現れて來るのだと考へる。ところが今日の同胞團體精神には、其の主要の根源たる敬上慈下の念が闕けてゐるから、唯物主義、實利主義、利己主義に趨るのである。そして其の利己心を満足せむがために團體の力を利用しようとするのである。斯の如き精神状態を以てしては、決して完全なる同胞心の起りやうもなく、随つて又、十分なる團結も出來得る筈がない。だから今日の時代を眞に救ふの途は何であるかと云へば、それは宗教々育を施して、其處から生れて來る力強い道徳を、社會生活の基調とすることである。訓育が宗教の光に照らされるやうにする事である。何事も同じレベルの上に立つてゐる人間相互の相談約束では、最後の權威を見出せない。社會の秩序を踏みにじる亂暴者が出るのもそれが爲で、凡ての争は敬虔な權威を認めないから起る事である。其の意味に於て一段高いところから來る光を仰いで、それを訓育の力とすることはどうしても必要である。

斯の如く宗教々育は、其の主要な効果だけを擧げて見ても、信念を堅固にし、敬虔慈愛の心情を有せしめ、同胞團體精神を強める特長を有してゐることが指摘されるのであるが、同時に又宗教々育は、自

然に正義の觀念を與へ、其の反面には獨を慎むことにも非常な力を有する。随つて價値の完成、文化の向上にも宗教々育の寄與するところは絶大であると思ふ。其の他なほ色々あらうが、次には方面を變へて、宗教々育の缺點を一瞥して見たいと思ふ。

二

宗教々育の直接効果は大體右に述べたところの如くであるが、それでは宗教々育を施すことに依つて起り得る弊害はどんなものかと云ふに、約十二ヶ條が算へられる。

宗教々育は今日既に社會の各方面から要求せられてゐると共に、又十分其の可能性をも持つてゐるが、それにも拘らず、何故に今日までそれが重視せられなかつたかと云ふと、それについては、明治三十二年の文部省訓令第十二號の精神が那邊にあるかを私は調べた事もあるがこゝには省略する、要するに宗教が今日まで其の必要を認められながら、而も教育の中に取入れられなかつた重大原因は、宗派的に流れ易いといふ點にある。私は恐らくこれが宗教々育の阻止された第一の要因であらうと思ふ。

宗派的に流れて、或る宗教の特殊の色彩が濃厚になると、反對派の人から問題が起されて來る。これは西洋にも語例のある事で、一例すれば獨逸の如きは頗る苦い經驗を嘗めてゐる。教區立にして見たり、教育問題を宗派の生徒別にしたたり、中には勢力のない宗派では教育者一人に生徒一人といふやうな

事までして見たが、結果は面白くなかつたのである。それで我が國でも、斯かる失敗を再び繰返さざらむが爲に、出来るだけ教育上に宗教を關係せしめないで來たのであるが、しかし我々から觀ると、それは因襲の上からの心配であらうと思ふ。

假に國民教育を、小學教育、中等教育と別つて見て、其の小學の方では、宗教的に教育するといふことは言ふ可くして行へない事であると思ふ。第一に先づ其の心理状態から考へて見ても、小學生の頭腦には、宗教とは何ぞやといふ基本問題すらまだ分つてゐない。宗教の何たるやもまだ知らない者に、宗教的に教育するといふやうな事が出来るものではない。例へば彼等に對して、日蓮、親鸞、クリスト、マホメット等の教儀にまで深く關係して理解させることが出来るかどうか、これは一寸考へて見ても分ることである。これ等の事は成人の頭腦を待つて初めて理解される問題なのである。たとへば此の頃は合科式教授法といふことが頻に提唱されてゐるが、それは例へば博物の知識を兒童に與へるのにも、廣く之を理科として物理、化學の知識をも合はせ授けるやうに、地理の教科を授けるにも、之を歴史科と相關係させて合科的に綜合的にする方がよいといふ意見であるが、これは誠に新しい且つ適正な考へで、これでなければ兒童の頭腦には理解しされるものではない。宗派的即ち分科的な宗教々育が兒童に對しては行へぬものであることは、此の論法からも立派に證明されると思ふ。そこで私は小學校に於け

る宗教々育は、普通人以上の或る力の存在を説くこと、即ち概括的な神とか佛とかの宗教の氣分を養成することだけで、十分であると考へる。そして又それが當然の態度であつて、それ以上に出ては成らないのだと考へる。其の程度にさへ止まつてゐれば、決して宗派的に流れるといふ弊害の起つて來ることはないのである。

只或る一宗一派の僧職にあるものを學校に伴れ込んで、それに宗教々育を擔當させることになると、勢ひ宗派的に流れ易いから、私はそれに反對する。過般の或る會議で、文部當局は、立派な人ならば牧師や僧侶を頼んで宗教々育を行はせてもよいといふ意見を發表されたが、これは明治三十二年以後、初めて聞く言葉で宗教々育公認の第一歩である。少々意外であるが喜ばしいことである。最も政治當局の主催でない場合には、曾て原敬氏も首相として三教會同の席に臨んで、同様の意見を述べられたことがあると記憶してゐるが、文部當局が學校長、視學官を集めて、其の席上で學校の宗教々育をも認許する意見を公表されたのは初めてである。

私としては宗教家を學校に招くよりもやはり其の學校の教師が、教科書に書いてある範圍、小學教料目の範圍内でやれば、それでよいと思ふ。尤も其の方針で進むには、小學教師の頭腦を養成することが先決問題であるが、それには將來は師範教育の改正とか講習會の開催其の他幾らも然るべき方法があら

うと思ふ。差當つてのところは、其處まで行かずとも、教師の頭腦が宗教に向いたならば、即ち或程度までの回心的修養をしたならば、或る程度までの宗教々育を施すのは必ずしも難事であるまいと思ふ。

第二には宗教々育を行ふと惡平等觀に陥り易いことである。どの宗教でも差別を排して平等に傾き易いのは一般であつて、隨つて階級意識は無視され易い。例へばクリスト教でも主なる神の前には人類は一視同仁であり、佛教では凡下俗智の輩も一旦開悟すれば釋迦、大日と同じ佛である。要するに凡佛の差別は悟るか悟らぬかだけの事である。だから、自他共にこれ平等ではないかと云ふことになる。斯ういふ思想の傾向は、下手に外れると、共產主義にまで脱線して行く虞があるが、しかし脱線は脱線で、決して正道ではない。眞の宗教は寧ろ斯かる惡平等に陥らぬことを教へるのを以て本旨とする。阿彌陀が何故に極樂を立てたかといふに、菩薩修行の階位は五十二位あるが、其の第七位即ち上から七段目の階層まで行くと、多くは空に墮する、之を七地沈空の難と云つて、こゝを無事に通り抜ければ等覺から妙覺に至つて究竟圓滿の佛となることが出来るのであるが、多くは此處で空に沈んで、一切皆空を觀じ斷見外道、空見外道とて極端な虛無主義に墮する。そこでそれを救ふために立てられたのが阿彌陀の極樂であつて、これあるが爲に佛の力で修行者が空に沈まずして進むことが出来るのだと云ふ。此の位までに佛は、惡平等觀に陥らぬやう、即ち空に沈まぬやうに大なる苦心をしてゐられるのである。だか

ら此の空觀に沈まないやう、正しく行はれさへすれば、宗教々育を行ふたところで、決して惡平等に陥る憂はないのである。

第三には非國家思想に陥り易いといふ缺點である。これは第二の缺點から當然導かれて來るところのもので、宗教々育を行つた結果として、國家の權威を認めず國境を眼中に置かなくなりけしまいかとの心配である。支那あたりの僧侶の中には、天子召せども應ぜずなどと云つて、それを宗教家の一見識と心得、又一の名譽であるとした。斯ういふ思想の傾向は、どの宗教にも起り易いもので、それが當じた結果は、國家の權威をも無視し、世界同胞主義の思想に陥り易い。西洋には勿論、東洋の宗教にも輒ともするとそれがある。先般起つた天理教別派の事件も、宗教の弊所に感染した結果の考へ方である。此の點は十分注意を加へて監視しないと危険であるが、しかし此の種の誤つた思想は、前にも述べた通り空の考へと關聯してゐる。一切皆空、一切平等と觀するから、國境無視といふ誤つた考へ方であるが、それは根本が既に正しくないのである。例へば般若心經の如きは、皆空と觀じてゐるが、最後には其空は唯だの空ではない無所得といふことに觸れて論じてゐる。其の説に依ると、一般の空といふことは畢竟有所得である。絶對空と觀ずるといふことは即ち「無」の相に執してゐることを示す。眞に何物も無いのではない、「無」といふことが有るのだ。それでは結局有所得ではないか、眞の無所得とは、有

無の相を超絶したところあるのだとしてゐる。此の見地から行くと、國家を否定するといふことは即ち有所得であつて、佛教の究竟地ではないと云ふことに歸する。佛教はそれ自體に於て世界的宗教であるが、斯の如く國家否定の考はないのである。だから眞に理解させて行つたならば、決して心配はないと思ふ。殊に我が國に起つた所謂日本的佛教には、そんな虞のあるものはない。

傳教、弘法の諸師が説いたところは、鎮護國家の思想である。法然は八十歳にして土佐に流謫されたが、而も寸毫も朝廷を怨み奉らずして、此の老齡に達んで偏士に佛法弘通の機會を與へられたのは朝廷の御恩であるとして、法弟等を戒めてゐる。九條兼實等上人歸依の人々は、却つて朝廷の御仕向けを怨み奉つたが、本人の法然は飽くまでも朝恩主義を振翳して欣然として謫地に赴いた。其の他親鸞の王法爲本、日蓮の立正安國、日本的佛教の思想には、一つとして國家を否定するものはない。眞の無所得に徹した眞の宗教なら、さうあるのが本當である。國家否定などの思想に囚はれずに、到る所青山ありの態度で行くべきであるからである。飽くまでも國家精神、國民思想を尊重して、其の民衆を救ふのが、眞の宗教の使命であつて、所謂應病與藥とはそれである。道を誤れば非國家思想に陥り易いのは缺點であるが、決してそれは絶對でない。寧ろ教育上正しき宗教思想に依つて健全なる國家思想を養成することは可能であると云つてよからうと私は考へるのである。

第四には非道德的觀念に陥り易いといふ缺點である。これも今迄に述べた缺點から當然導かれて來るものである。今日頻りに宗教々育を要求する聲が起つて來てゐるのは、在來の智育、德育だけでは思ふやうに訓育の効果があがらないから、宗教の力を借りて道德觀念を養成しようとするが爲であるのに、果して斯かる缺點があるとするならば、宗教々育も問題だといふことになる。

ところが實際を見ると、或る種の宗教には、社會道德を低く視る傾きがある。一例を云ふならば親鸞の宗教の如きは、惡人救済を高調してゐる。佛の眼には善人よりも惡人の方がヨリ以上に救済の必要があるとする。随つて之を誤解すると、惡人の方が善人よりも一層救はれる機縁が多いのである、惡事をするのは佛に愛される早道であると云ふ風な考に陥り易い。これは固より極端な場合であるが、兎に角善惡の見界が嚴重でないといふことは、遂には善惡を超越して其の區別を無視する考が起り易い、とするのが今日までの懸念であつた。此の如き例が宗教の弊害である。

しかし全一神教で行くと、極樂とか天國などと云ふものは、來世にあるとか、或は又、何億萬里を隔てた西方にあるとか、天上にあるとか考へない。直ちに此の我々の生活してゐる實人生にあるので、其處に到達し得るか否かは、只回心の有無及び程度によつて決するのだとする。勿論此間には深遠な意味と了解とを有たなければならぬが、既に其の根據を實生活に置くとすれば、宗教生活は畢竟道德生活

と一致せねばならぬ。教育と宗教との關係も、これで附くと思ふ。何處までも、宗教が死後的、未來的、出世間的の境地をのみ絶對に主張してゐるならば、到底一般教育と握手の可能性はないが、神人合一的思想によつて、回心の有無で世界を區別し、悟を開けば其處が其のまゝに淨土であるとすると宗教ならば、根本に於て道德觀念に矛盾する所はないのである。

第五の缺點は智識を軽く視る傾があることである。一般には宗教信仰と知識とは對敵關係にあるから、信仰を冷却させるものは懷疑であり、懷疑は知識と密に關聯してゐる、而も宗教の大海に入らむとするには唯信の一路あるのみであるから、宗教から觀れば知識は害物である。だから法然も知識を以ては念佛は申せない、一文不知の尼入道となつて念佛せよと説いてゐるし、クリストの如きも、幼兒の如くならずば天國に入ること能はずと説き、智慧のある者が天國の門に入る事の困難を、駱駝が針の穴を通らむとすることに譬へてゐる。斯ういふ風に、凡ての宗教は知識の有害を認めてゐる點に於て、一般の教育とは合はない。勿論偏智教育といふことは宜しくないとしても、現に學校では一日の課程中の大多數の時間は智育を行つてゐるのであるから、智育を排除しては教育は成立たない。此の矛盾した立場を何處までも押詰めて行くと、結局宗教教育の可能性はないことになるが、これも眞の宗教は、既に述べた如く智情意の三作用を統一綜合するものであつて、假令大圓鏡智までは行かずとも、知識を以て善

惡正邪の判断を下すのであるから、眞の宗教思想を根據として行ふならば、宗教と知識とは何等の矛盾もなくして共に進み得るのである。

第六には迷信に陥り易いといふ缺點である。これも互に根源的反對の立場にあるもので、元來宗教は神祕的であるから迷信に墮し易いとも云へるが、科學の洗禮を受けてゐなかつた中世紀前後の宗教ならば兎も角、今日の宗教は科學を無視しては立ち得ない。如何なる宗教も常に科學的根據の上に立つて、科學の力の及ばぬ所に信仰を置いてゐる。勿論それも極端な事を言へば、迷信に近いものだとも云へるかも知れぬが、よし迷信であるとしても高尚なる迷信である。勿論迷信と正信の境界線を明劃する事は困難ではあるが、普通の迷信は一般に宗教の排斥するところのもので、今日の宗教の目的は正しい信仰を與へるにある。管長の垂示などに「教化の純正」といふことを特に注意してゐるのは其の爲である。尤も實際上は迷信もまだ多く行はれてゐるであらうが、それは教化の局に當る宗教者が、營利のために迷信を利用することが悪いのである。眞の宗教は正信を與へることに存するのである。

第七には宗教々育を施すと、厭世的悲觀に陥り易いといふ缺點である。これも事實存在することであらう。既に宗教なるものは其の第一歩に於て、現世に満足できぬところから起るのであるから厭世的悲觀に陥るのは當然である。青少年の自殺なども、或は冥々裡にそんな處から導かれて來るかも知れな

いが、しかし宗教の極致は、樂天にあつて厭世ではない。厭世は畢竟樂天の前提である。一般に東洋の宗教は皆さうである。只こゝに注意を要するのは、其の樂天は、呑氣な樂天ではなくして、回心即ちコンヅアジョンを経た樂天である。だから、宗教を修したがために厭世になるといふのは、眞の宗教々育が行はれてゐないことを意味するのである。

第八に宗教の輩が貴族的資本家的な心情に傾き易いといふ缺點である。一般民衆の中に、貴族とか資本家とかといふものゝ有るのが良いかわるいかは別問題であるが、兎に角宗教家として、其の様な點があつてはならぬ。教祖や宗祖は、決してそんな事はなかつた。句佛上人の所謂「勿體なや祖師は紙衣の九十年」で、各宗の祖師は實際紙衣を着る程の質素な生活を送つてゐたのである。末世末法の僧侶にして貴族的富豪的の生活をしてゐる者は、正に祖師に對して慚愧せねばならぬ。然るに一般に宗教家が、豪奢に近い生活を送つてゐるのはどういふものであらうか。信徒に對しても貴族特待的態度になるとは不都合である。既に此の冬には、五萬何千人の自由労働者にどうすれば無事に歳末を越させることが出来るかどうか問題になつて、市の當局者などは非常に心を苦めてゐる程であるのに、今日大多數の貧困者を塗炭の苦みから救ふ有力な防貧施設を必要とする此の非常の時に方つて、肝腎の宗教家がそんな氣分では、それが爲に世間の人は宗教々育に反感を持ち合せぬかと思はれる。宗教家忌避の念を

生ぜしむる。しかしそれは誤りであつて、寧ろ宗教々育に依て如此宗教家を反省改悟せしめねばならぬ。如此事業は却つて一層宗教々育の必要を裏書するものであると云はねばならぬ。

第九には、宗教は教祖の生活を見ても分る通り、一體に消極的素朴な人生觀を立てる傾きがある、だから宗教々育を盛にすれば、政治經濟の發展を阻礙するやうな事が起つて來はせぬかといふ心配がある。しかし今日は宗教家と雖も、政治經濟を顧みないわけには行かない。政治なしには一日と雖も暮らせないし、經濟現象も亦同様である。如何にも宗教の境地に立てこもる人は政治經濟に縁遠い傾があるが、今後は從來と違つて宗教は價値の綜合統一をやる位置を占めて行くものであり、又文化の母胎として働くものであることに目覺めるとしたならば、眞の宗教の安心を得ることに依つて、現代の政治も淨化することが出来るのではあるまいか。今日ともすれば諸種の醜聞が生起するのは眞の宗教の意味を解せぬことに基いてゐるのではあるまいか。日本の政治は宗教を無視してはよくないのであつて、例へば大嘗祭、御即位禮の如きも、宗教上の儀式たる一面に於て政治である。所謂教政一致で、日本は古來宗教と政治とは密接不離の關係にあつたのであるから、それ等の點から考へても、宗教が政治家の頭腦に眞に理解されることは必要であると思ふ。又、經濟界には暴利を貪つたり不正品を輸出するやうな富豪や巨商が隨分あるやうであるが、これ等も宗教心の無いところから來てゐるのではあるまいか。人間が

悉く神の現れであり、又キリスト教流に云つて神の子であるならば、其の様な事はしたくとも出来ない筈である。經濟界惡化の原因は全く其處にある。我々國民の全部が努力して、共產主義の如き惡思想の蔓らぬやうにベストを盡さねばならぬことは勿論であるが、斯ういふ思想を發生せしめた原因の一部分は現代社會が、宗教を解しないことから來てゐるのである。そして之については政治家や、實業家に多くの責任がある。私は是等の點からしても、大いに宗教*育を施して、眞の發展を遂げることを期せねばならぬと考へる。

三

其の他なほ小さい事を云へば、悲觀の反對に、間違つた樂天觀に奔ること、一種の乞食根性を持つことも、宗教の缺點であり、(十一)又、狂的な言動をすることも確に一つの缺點に算へられるであらう。まだ年が若いのに頗る宗教に熱心であるから、奇特な人であると思つて注意してゐると、あれは發狂したと云ふことを後に聞かされるやうな事が往々ある。(十二)斯う云ふ風に宗教は一面に於て甚だ危険なものである。或る武官が曾て私に、陸軍士官學校にも宗教*育を施行してはどうかと云はれたので、其の時に私は、それは先づやらぬ方が宜からう、宗教はあなた方の腰の佩劍である迂濶に抜くと危険であると答へたが、漫に之を施すと、或は狂人を出し、或は厭世悲觀に墮せしめる。現に今までに述べて來

た如く、宗教々育は確に必要であるが、若し之を施さうとするのならば、教育者が餘程シツカリしなくてはならぬ。即ち以上に擧げた宗教の缺陷を凝視して、如何にすれば其の害を避け得べきかについて周到なる用意を加へつゝ、之を行はねばならぬ。又更に他の缺陷を指摘するならば、淫風の媒介も其の一つである。(十三) これは藝術的遊樂的な氣分から將來されることが多いのであるから大いに注意せねばならぬ。

要するに私は宗教々育の必要は十分に之を認めるもので、寧ろ其の遲きを遺憾とする程であるが、宗教の一面には又諸種の弊害があるから、茲に其の十二三の限界に着眼して之を摘示し、今日宗教々育を實行するに當つては是等の諸缺陷を如何にして救濟して、健全なる宗教々育を施し得しむべきかを諸君と共に研究せむと欲する者である。

夜のしめり空にのほりてやくもたつ

すさのみとしる朝きよきかも

— 須佐建親 —

○ 神と君のみことかしこみ國民は

大御心にかなはざらめや

○

凍空に朝凝る雲の流れ絶えず

峽なれば見るも晝青ぞらを

朝雨はれて冬を眞澄める澤たづみ

かこめる村に梅のともしき

宗像 逸耶

中島 達源